

Title	良心の興亡-近代イギリス道徳哲学研究
Author(s)	柘植, 尚則
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44475
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	梶 植 尚 則
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17366 号
学位授与年月日	平成 14 年 12 月 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	良心の興亡—近代イギリス道徳哲学研究
論文審査委員	(主査) 教授 鷺田 清一
	(副査) 教授 中岡 成文 助教授 入江 幸男 名誉教授 塚崎 智

論文内容の要旨

本論文は、近代のイギリスの道徳哲学の主要なテーマの一つであったが現代では(英米系の倫理学では)ほとんど死語になりつつある「良心」という概念を、17世紀の誕生期から18世紀の完成期を経て、19世紀におけるその終焉まで、思想的に跡づけ、その興亡の理由を論じている。

第1章では、誕生期の「良心」論を跡づけており、ケンブリッジ・プラトニストによる「道徳的行為者」の観念の確立と、シャフツベリによる「徳と利益」の一致の「証明」が、18世紀イギリス良心論の「良心と自己愛」という問題系を準備することになったとする。

第2章では、近代イギリス良心論を完成したといわれるバトラーの「人間本性」論を検討する。そして、バトラーにおいては「自己愛」と「仁愛」という一般的な道徳原理の上にそれらを是認する「良心」という反省の原理が立てられているが、それは「良心」が「自己愛」に対抗する合理的で冷静な原理として格上げされたからであるとする。

第3章では、ハチスンとヒュームの感情論を取り上げ、そこに近代イギリス良心論の大きな転回をみる。つまりここでは、自己に対する道徳判断が他者の感情に依拠すること、そして称賛への欲求が道徳的行為者の形成の端緒となることが示され、そういう論点が、近代イギリス良心論を第二の完成へと導くことになる論じる。

第4章では、その第二の完成であるアダム・スミスの道徳哲学について考察する。スミスは、人間は「相互共感」への欲求や「称賛への愛」によって道徳的にふるまうようになるが、他方で「称賛に値することへの愛」をも有しており、後者が良心を基づけ、人を真に有徳にすると考えるのであるが、これは行為の徳性を動機の「適宜性」のうちに見いだすものであり、ここに自己愛を正当化する新たな論理が確立される。そしてそのことで逆に、「良心」の後退への道が開かれたと解釈する。

第5章では、J・S・ミルとダーウィンの良心起源論を検討し、これが近代イギリス良心論の終焉を意味すると論じる。ミルは良心を直覚的な道徳判断の能力とは認めず、それを「義務感」としてとらえる。一方、ダーウィンは良心の起源を共感などの社会的本能のうちに見いだす。そして両者の理論はともに、個人の自立的な道徳判断や自己反省を消極的にとらえる点で、18世紀的な「道徳的存在」を否定するものであるとする。

最後に、以上の考察を踏まえて、近代イギリス道徳哲学における「良心」の興亡の理由を総括する。17世紀末には「自己愛」が時代の支配的な精神になっており、こうした「自己愛」への対抗原理として「良心」が賞揚され、18世紀にかけて「良心」論が繁栄していったのだが、それと同じ理由で「良心」論は衰亡していった。つまり、19世紀は、(私益と公益の人為的な一致を図る功利主義にみられるように)「良心」は自己愛の対抗原理としてはもはや必要で

はなくなったのだというのである。『良心』の興亡の背景には自己愛がつねに存在していた。近代イギリス良心論は、それが繁栄したのと同じ理由で没落したのである」。これが結論となる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代イギリス道德哲学史を「良心」論の展開という切り口で跡づけ、その意義を思想史的に論じた西洋倫理学史の篤実でかつオリジナルな研究である。このような未踏の研究は、論者の長年にわたる文献研究の蓄積によってはじめて果たされえたものであり、1990年代に再版されたバトラーやシャフツベリ、リードの第一次文献をも十分に踏査しかつ「良心」論史を19世紀のミルやダーウィンまで跡づけたその緻密な議論は、同時に体系性をも十分に備えており、説得力がある。とはいえ、本論文はけっして単なる概論に終わるものではなく、これまでにない新しい論点を随所で示している。とりわけ「良心の興亡」という意欲的な表題からもうかがえることであるが、論者の議論は、近代の道德哲学で「良心」が重視されたのは、それが近代社会における自律的な個人の思想的課題に深く関わっていたからだという通常の解釈に、思想史研究の立場から強く異議を唱えるものでもある。そのような意欲的かつ緻密な論文として本論文を位置づけることができる。

「良心」論がその第一の完成へと向かうときの「道徳的行為者」の概念の成立とその劣化、ならびに「良心」の格上げの内実と「良心」と「自己愛」の弁証法についての考察、さらには第二の完成に向かうときの「他者による称賛」という契機の導入が「良心」論にとってもつ意義についての考察が、本論文のハイライトである。もっとも、前者の論点については、イギリス思想史のなかでホップズの与えた「自己愛」の衝撃に後の思想家たちがどのように応えたかという点から考えるのが一般的であるのに、あえて論者がケンブリッジ・プラトニストから出発した、その理由の詰めがもう少し求められよう。また、後者の論点については、「自己愛」を高い自己評価と考え、そうしたプライドの社会技術化の過程としてマンデビルから功利主義、あるいはダーウィンへと展開する途を描けないかという異論もありえよう。これらの点を詰めることは、「自己愛」の原理が「良心」論の成立と衰退の双方に関わるという本論文の趣意を補強することになり、その意味でそれはこの方面の研究を今後さらに推し進めてゆくなかでの課題であるとも言える。

膨大な文献を渉猟して、「良心」論の盛衰という明確な視点から近代イギリス道德思想史を描きなおした本論文は、そのきわめてシャープな問題提起と分析とによって、イギリス思想史研究に寄与するところが大きいと判断される。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。